

レーニン主義からファシズムへ

蒋介石と独裁政治モデル

樹中 毅

I 問題の所在

1920、30年代の中国において、レーニン主義とファシズムは模倣すべき集権政治のモデルであった。本論文は、国民革命時期における蒋介石のレーニン主義に対する模倣と、安内攘外時期におけるファシズムへの傾斜に焦点を当てることによって、その独裁イデオロギーの形成と発展を巡る特徴を鮮明に浮かび上がらせようとする一つの試みである。

ペイヨン・ルウ (Pichon P. Y. Loh) 氏が「歴史における蒋介石が近代中国に不可欠な要素だったか否かは、正確には答えられない問題だ」と指摘するように (Loh, 1971: 107)、蒋介石の歴史評価は、様々な論争を伴う困難な問題である。だが、蔣が果たした歴史的役割に比して、これまでの蒋介石研究の蓄積は十分とは言えず、とりわけその独裁イデオロギーに対する体系的な分析を欠いてきたことは否定し得ない¹⁾。周知のように、蒋介石には強烈な反共主義者のイメージが付きまとっている。蔣自身もその著作『蘇俄在中国』において、「本党の連ソ容共政策は、一時的には西洋の植民地主義に対抗できるだろうが、決して国家の独立と自由の目的を達成できない」(蒋介石, 1984 [巻9]: 31) と述べ、「ソヴィエトの政治制度は、専制と恐怖の組織であり、わが中国国民党の三民主義による政治制度とは、根本的に相容れないものだ」(同: 28) と強調する。従来の研究において、研究者の間では暗黙の合意の内に、この蔣のイデオロギー的反共の立場と結びつける形で、その独裁統治を「反共軍事独裁」、「反動ファシスト支配」と見なす「通説」が広く浸透してきた(八巻, 1972; Eastman, 1974; Tian, 1972)。確かに、1920年代後半から1930年代における国民党の反共化と五度にもわたる囲剿戦の断行、及び非公式エリート組織(三民主義力行社[通称藍衣社])による中国ファシズム運動の出現は、これらの「通説」にそれなりの説得力を与えてきたことは間違いない。

だが、野村浩一氏が「蒋介石が、とりわけ軍の建て直しのために懸命の努力を重ねていたことはたしかである。他方また、彼が全領域にわたってひたすら個人の独裁的権力のみを求める権力追求者とは到底いえなかった」と指摘し(野村, 1997: 352)、また今井駿氏が「藍衣社の主張を一個の抗日論として見るとき、そこには、後の抗日戦争期の中共の主張と共通するものを見出すことができる」と述べているように(今井, 1997: 203)、これまでの「通説」は、蔣統治の実態とその独裁イデオロギーの特徴を必ずしも説明しているわけ

ではない。従って、もし従来の「通説」を検証することなく、また、米ソ冷戦が最も先鋭化した時期に発表された蔣の著作を無批判のままに受け入れるならば、われわれは蔣がレーニン主義革命方式の模倣を通じて、国民党の革命戦略と戦術を強化し、また、そのファシズムへの傾斜が資本主義の危機から生じた「反動」によるものでなく、むしろ、それはレーニン主義受容の延長（民族革命の戦術、イデオロギー的強化）という性格を有していたことを見落とすことになる。

本来、イデオロギーは、ある特殊的、歴史的条件下に生じる政治的危機の中から生まれる。そのため、歴史と文化の異なる政治社会に移植した場合、現実の政治環境への適応から、イデオロギーそのものが「変容」し、それ自体の概念規定がいよいよ曖昧となる。本論文が対象とする国民革命時期と安内攘外時期における蔣介石による全体主義的「革命独裁」の成功例に対する模倣もまたその例外でなく、とりわけ蔣がレーニン主義とファシズムのイデオロギーの対立面に関心を払うことなく両者を模倣したため、それぞれの「定義」はいよいよ不可能となる。

しかし、本論文の目的は、レーニン主義とファシズムの定義を試みることではない。むしろ、レーニンが「ボルシェヴィキの戦術は……唯一の国際的戦術であった。なぜなら、それはすべての国で革命を発展させ、支持し、めざめさせるために一国で実行できる限りのことを実行したからである」と主張し（レーニン、1958: 312）、また、S・ノイマンが「ファシスト革命の源泉はさまざまである」と指摘するように（ノイマン、1960: 107）、たとえ蔣によって国民党のイデオロギー体系に組み込まれたレーニン主義的原則とファシズム理論が、それぞれその本来の性質とは「似て非なるもの」であったとしても、蔣が両者の集権技術を以党治国のモデルとし、レーニン主義（民主集中制、党の指導、暴力的権力奪取）と、ファシズム（指導者原理、国家有機体説）の模倣を通じて、その独裁統治の「型」を形作っていったことは否定し得ない。それ故、蔣介石の独裁体制には、レーニン主義的原則とファシズム的行動様式が混在する。

本論文は、アジアの民族運動において、レーニン主義とファシズムがどのように選択的に取り込まれ、蔣介石がどのような意図と論理で国民党の革命戦略（連ソ容共政策、安内攘外政策）を外来の独裁理論によって強化したかに焦点を当てる。本研究は、蔣介石の独裁イデオロギーの形成（レーニン主義革命方式の需要）と発展（階級闘争とレーニン主義戦術の分離、ファシズムへの傾斜）を分析することによって、その特徴（レーニン主義とファシズムの混在）を捉えようとするのが目的である。

II レーニン主義戦略・戦術への接近

1. 国民党のレーニン主義化

1917年のロシア革命は、沈滞気味だった国民党の民族革命運動に衝撃を与えた。とりわ

けレーニンが「植民地民族問題に関するテーゼ」において、民族主義革命運動と階級闘争が結合しうると提起したことで、その世界革命の戦略は、中国革命と世界革命とを結びつける理論的基礎となった。蒋介石は、1921年の孫文宛の書簡において、「革命後のロシアは列強の軍事、政治的圧迫に屈さなかった」と讃え、「わが党はより一層内部を団結し、外交（への依存）を棄て、ソ連のように自強自立を手本としなければならない」と進言し、早くから革命ロシアに関心を寄せていた（蒋介石、1931a: 1-2）。

1923年9月から12月にかけて、蒋介石は孫逸仙博士代表団団長としてソ連を訪問し、トロツキー、ブハーリン、チチャーリンらと会見し、中国国民革命への支援を訴えるとともに、自ら立案した北京攻略計画をソ連革命軍事委員会に提出した（楊天石、2002: 87-106）。ソ連側は「蒋介石参謀長はかつて日本で軍事教育を受けており、国民党左派に属する」とその政治的立場を肯定したが（中共中央党史研究室、1997: 288）、その軍事冒険主義には消極的であった。このように、当初から国民党とソ連の間には「思惑のズレ」があり、即ちソ連はレーニン主義革命の世界戦略の一環として中国革命への援助に乗り出し、国民党のレーニン主義化（改組と反帝統一戦線の結成）を当面の目標としていたのに対して、国民党は、あくまでも軍閥を倒すための軍事援助を期待していたのである。

1923年11月12日、ソ連革命軍事委員会首脳との会見で、副主席のスクリャンスキーは蔣に対して、「目下、孫逸仙と国民党は……政治工作に全力を注ぐべきであり、さもなければ現有の条件下での一切の軍事行動は、必ずや全て失敗に帰すだろう」と勧告した。これに対して、蔣は「中国では……地球上の全ての帝国主義者がみな中国の革命者に反対している。このような状況下では、……軍事行動を取るのは必要だ」と反論し、中国革命とロシア革命の条件的相違を強調しつつ、軍事援助を引き出すことに努めた。しかし、スクリャンスキーは「革命運動における民衆に対する政治工作の重要性」を堅持し、両者の主張は平行線のままだった（中共中央研究室、1997: 310-311）。11月27日、ソ連革命軍事委員会主席トロツキーは蒋介石との会見で、「もし孫逸仙が軍事行動のみに従事するならば、中国の労働者、農民、手工業者、小商人の眼には、彼は北方軍閥の張作霖と呉佩孚と同じように映るだろう」と述べ、「もしわれわれが孫逸仙に軍事援助を与えるならば、……中国社会の世論は、張作霖は日本の代理人であり、呉佩孚は米英のそれであり、そして孫文はソ連の代理人であると見なすだろう。このような状況の下では、革命運動は成功を獲得できない」と指摘し、改めて蔣の軍事計画を拒否した（中共中央党史研究室、1997: 340）。結局、蒋介石は期待したソ連からの援助を十分に引き出せないまま、軍官学校（黄埔軍校）の建設とソ連への留学生派遣の合意をとりつけるにとどまった。

トロツキーとの会見の翌日（11月28日）、コミンテルン執行委員会主席団は、ボイチンスキーが起草した「中国民族解放運動と国民党問題に関する決議」を採択し、その国民党に対する政策と立場を明らかにした。「決議」では、政治工作重視の原則に基づいて三民主義を再解釈し、民族主義に反帝国主義のスローガン、民権主義には指導民主主義の原則（天賦人権の否定）、そして民生主義には労農重視の要素を導入することで（中共中央党史研究

室、1997: 313-314, 343-344)、国民党に革命運動を再構築するための方向を示した。この「決議」は、国民党の改組に決定的な影響を与え、その内容は翌1924年の「国民党一中全会宣言」にもよく表れている。改組後の国民党は、民主集中制に基づく党の最高意思決定機関（中央執行委員会）を設置し、党による指導の原則を確立するとともに、民衆を革命運動に動員、組織化するための党の基盤を整備した。このように、国民党は国民革命を指導する中心勢力に成長し、ソ連共産党を模倣した以党治国体制の確立による国家統一の革命戦略を全面に打ち出したのである。

しかし後年、蒋介石は『蘇俄在中國』において、コミンテルンの決議は「中国国民革命に対する正確かつ切実な認識がなく、中国社会を無理に階級分けし、階級闘争を重んじ、その革命の友〔国民党〕に対する策略は、革命の敵に対するそれよりも更に多い」と批判した（蒋介石、1984 [巻9]: 27）。国民党の党史家である李雲漢氏と蔣永敬氏は、この蒋介石の言明を根拠に、蔣が訪ソ中にソ連の陰謀に気づき、早くから共産党を警戒していたと指摘し、様々な傍証と論理を駆使しながら、改組時における国民党の対ソ自主性を強調する（李雲漢、1994: 376; 蔣永敬、2000: 50-51）。確かに、1923年の廖仲愷宛の書簡からも読みとれるように、蒋介石は早くから思想的反共の傾向を有していたことは間違いない（蒋介石、1984 [巻36]: 104）。その限りにおいて、李雲漢氏と蔣永敬氏が下してきた結論は、蒋介石の本質的反共の立場を説明する上で、決して誤ってはいない。だが、すでに指摘したように、もしこの蒋介石の言明を額面通りに受け入れるならば、われわれは、蔣がレーニン主義革命戦略・戦術の模倣を通じて、その独裁統治の「型」を形作っていった側面を軽視することになる。この点については、次節で検討する。

2. 蒋介石におけるレーニン主義革命方式の受容

1926年の「国民革命軍総司令出師宣言」において、蒋介石は「呉〔佩孚〕賊は『討赤』を唱えているが、討赤とは即ち帝国主義者が全世界の被圧迫民族に対抗し、全世界の革命聯合戦線を破壊するためのスローガンに他ならない」と攻撃し、「帝国主義者の言う赤化者とは、実は革命の民衆化だ」と述べ、「凡そ愛国者はいずれも赤であり、中国の自由と平等を求める者は全部赤であり、軍閥と帝国主義に反対する者は皆赤である」と強調した（蒋介石、1927a: 76-77）。本稿が用いる基礎資料の一つである『先總統蔣公思想言論總集』では、ここで引用した部分がすべて削除されている。おそらくこの時点で、蔣は直ちに中共と袂を分かつつもりはなく、それ故、蔣は国共合作を継続する立場を崩さず、その「赤」、すなわち共産党の革命性に対する評価もあえて隠そうとはしなかった。広東時代の蒋介石は、レーニン主義戦略と戦術を積極的に吸収し、そのレーニン主義の受容には、次のような特徴を指摘することができる。

第一は、国民革命とコミンテルン指導の世界革命を戦略的に結合しようとしたことである。蒋介石は階級革命に距離をおきながらも、「国民党は世界革命の一部を構成する」と位置づけ、「中国革命が失敗すれば、それは世界革命の失敗である」とし、「世界革命を貫

徹できなければ、ロシアの革命はその意味を失い、ソ連自身も大変危険となる」と指摘する（蒋介石、1925: 2-3）。蒋介石は階級革命の不可避性を認めていなかったが、孫文の「世界の我らを平等に待遇する民族との連合」の立場を踏襲し、その延長線上に国民党を世界の反帝反資本主義闘争の革命陣営内に組み込もうとした。蔣の狙いは、世界の被圧迫民族による反帝闘争に参加し、その結集による反帝運動同盟の結成を通じて、苦境にあった中国革命の局面を打開しようとした点にあった。事実、不発に終わったものの、蒋介石は訪ソ時に、英米仏日の資本主義列強に対抗するための「三大国（ソ連、ドイツ、中国）同盟」の結成を提案している（中共中央党史研究室、1997: 332）。このように、蒋介石はレーニン主義の世界革命を単なる階級革命として捉えることなく、むしろ被圧迫民族による反帝闘争の一環として捉え、その戦略的意図は、国民党とソ連・コミンテルンの政治的利害の一致に基礎をおきつつ、コミンテルン指導の世界革命との連携を強化することによって、中国の国民革命運動に有利な情勢を作り出そうとするものであったのである。

第二は、レーニン主義党の組織原則と戦術の導入を主張し、国民党を権力奪取と全国政権を担いうる革命政党として強化しようとした点である。国民党は建党以来、孫文と広東出身の側近幹部が最終決定権を掌握し、公式の政策・意思決定機関と、党の基盤を支えるための下部組織を欠いていた。組織の弱体と地域への偏りこそ、国民党建党以来の弱点だった。蒋介石は、革命歴では汪精衛、胡漢民、鄒魯らの広東出身者に及ばなかったが、浙江出身の蔣は、改組前の国民党組織の弱体と「広東政治の挫折」を比較的批判し易い立場にあった。蔣によれば、「以前の我々の党は組織と訓練がなく、それ故わずかな力すらなかった」と厳しく批判し、「総理がソ連の党組織の方法を確信するようになった後、はじめて彼らの方法を模倣してわが国民党の改組に用いたのだ」と述べている（蒋介石、1927b: 218）。同じく反共思想の持ち主だった張継、鄒魯らとは異なり、蒋介石はその思想的反共の立場にもかかわらず、革命戦術としてのレーニン主義党組織を高く評価していた。蒋介石は民主集中制、党の指導、暴力革命といったレーニン主義党の組織原則と戦術を国民党に注入することにより、散漫な紀律と組織の弱体という国民党建党以来の弱点を克服しようとしたのである。

第三は、ソ連労農赤軍を模倣した国民党独自の軍隊の建設である。蒋介石は、早くから厳密な紀律を誇るソ連赤軍に関心を寄せ、1920年の「上総理軍事意見書」において、「軍制は労農兵制を参考にすべき」と建議していた。資料の制約から、蒋介石がどのように労農兵制を構想していたかは不明だが、蔣が革命武力は人民に基礎をおくべきであり、軍閥のような私兵に頼ってはならないと考えていたと推測できる（山田、1980: 162）。ソ連滞在中に実際にソ連赤軍に接した蒋介石は、「真に党の三民主義実現のために戦うには、ソ連赤衛軍のような編制と訓練を用いなければならない」と強調し（蒋介石、1927b: 210-211）、その「ボルシェヴィキ軍」の戦闘力に対する確信を深めている。帰国後、黄埔軍官学校校長に就任した蔣は、ソ連人顧問協力の下、国民党独自の軍隊の建設に尽力した。黄埔建軍において特筆すべきなのは、党代表制の導入である。川島弘三が指摘するように、党代表

制はソ連赤軍のコミッサール制を手本とし、党の軍に対する優位と統制を確保するためのものであった（川島、1988: 14）。蔣はソ連赤軍を模倣した厳密な紀律を持つ党軍を創設し、革命運動の遂行を支えるための武力基盤を作り出すことによって、国民党の長年におたる軍閥への依存を根本から断ち切ろうとしたのである。

北伐直前の黄埔軍校における演説において、蔣介石は「中国が革命を行うには、全ての勢力を集中し、ソ連の革命の方法を学ばなければならない」と改めて呼びかけ、中国革命が成功するための条件として「(一) 一つの党を中心とし、革命の勢力を統一する。(二) 政権を掌握し、極端な専政を行う。(三) 首都を占領し、全国に号令を発布する」ことが不可欠と強調した（蔣介石、1926: 95-96）。すでに国民党は中華革命党時代に「革命独裁」の構想を打ち出していたが（横山、1996: 47; 味岡、1991: 44）、それを実行するための組織論、戦術論を欠いていた。蔣介石は、レーニン主義革命方式によって国民党の革命戦略と戦術を強化し、ソ連共産党のような以党治国体制を作り出すことによって早期の全国統一を図ったのである。

事実、北伐期から訓政時期にかけての国民党による独裁強化は、先の蔣が革命成功の条件としてあげた主張を踏襲しており、それはソ連共産党の成功例に対する模倣の域を出るものではなかったと言える。このように、蔣介石はその本質的反共の立場にもかかわらず、民主集中制、ソ連赤軍の紀律、党による一元的指導、暴力革命を高く評価していたように、のちに顕在化するその独裁統治の「原型」は、レーニン主義党の原則への模倣にあったのである。

III 「革命独裁」の確立を巡る葛藤

1. 階級闘争とレーニン主義戦術の分離

1924年の「国民党一全大会宣言」に組み込まれた階級的色彩（労農扶助）に象徴されるように、国民党は、コミンテルンの強い影響の下に行われた改組と三民主義の再解釈を通じて、それまでになかったレーニン主義的政党としての性格を獲得した。改組後の国民党は、反帝反軍閥を革命スローガンに掲げ、以党治国のモデルを欧米型政党政治からレーニン主義的一党政治に移し、民生主義に労農扶助の政策を取り入れることによって、イデオロギーの強化と党組織の再編に成功する。このように、国民党の民族運動とレーニン主義戦略・戦術の結合は、「革命独裁」の出現を意味した。

1925年の孫文没後、連ソ容共政策を積極的に支持することで、急速に台頭を遂げた蔣介石は「わが総理の三民主義を実施することは、即ち間接的に国際共産主義の実施である……吾は三民主義の為に死に、即ち共産主義の為に死す」と言明した（蔣介石、1927a: 42）。蔣の言明は、いかにも革命的熱情に満ちており、中共の支持を集めようとする意図が窺える。だが、広東時代の蔣介石は、ロシア革命の成功を喧伝し、様々な論理を駆使して三民

主義と共産主義の同質性を強調したが、無条件にソ連共産党の経験を輸入したわけではなかった。前節で見たように、レーニン主義の受容において蔣が注目したのは、マルクス主義ではなく、戦術論、組織論としてのレーニン主義であった。蔣介石は、純粋に革命技術としてのレーニン主義を高く評価し、階級闘争とレーニン主義戦術を切り離すことによって、国民党の民族革命運動への適応を図ったのである。

蔣介石は、共産党員とは異なり、マルクス・レーニン主義を不可分の理論体系とは考えない。蔣によれば「中国のように未だ産業の立ち遅れた所では、マルクスの言う階級戦争や無産階級による専制は不必要である。それ故、我々はマルクスの意思を行ってもよいが、マルクスの方法を用いてはならない」と強調する（蔣介石、1927a: 352）。さらに蔣は「コミンテルンは世界革命を指導する総機関であり、……国家の枠組を超えた存在である」とし、「コミンテルンの指導があってこそ、ソ連は世界の被圧迫民族と被圧迫階級の援助が得られ、その革命の成功を守ることができた」と述べ、あくまでも被圧迫民族の反帝闘争を世界革命の一環として捉える（蔣介石、1927b: 253-254）。蔣介石におけるレーニン主義革命方式の受容は、国民革命運動の戦術強化から出発しており、そのイデオロギー解釈は、孫文の連ソ容共の立場（階級革命の否定、世界の我らを平等に待遇する民族との聯合、国民党指導の原則）から逸脱するものではなかったのである。

しかし北伐の途上で、「CP（中共）の発展はあまりにも速すぎる」と脅威に感じた蔣介石は、かねてからあった「反共化」（ソ連不信と中共への警戒）の葛藤がいよいよ増大した（蔣介石、1927b: 247）。1927年4月12日、蔣介石は突如として上海で反共クーデターを発動し、イデオロギー的反共の立場を鮮明にした²⁾。

蔣介石によれば、「以党治国は、わが党の不変の主張である。共産党は中枢のありかをかぎつけ、至る所で党務を掌握し、……共産党員になりそうな者を努めて吸収しようとする……いまや国民党は共産党の予備学校に成り下がった」と危機感を表した（蔣介石、1927a: 345）。しかし、反共クーデターは、孫文の正統後継者としての地位を失いかねない行動であり、革命勢力に対する鎮圧は、軍閥と見なされかねない暴挙であった。蔣はこの点を強く意識して、中共に対する鎮圧を「これは少数分子の叛乱行動を未然に防ぐためのものであり、国民党の如何なる政策をも変更するものではない」と弁明した（蔣介石、1987: 247）。すなわち、蔣介石は国民革命の戦術としてレーニン主義を導入しながらも、「階級政党化」することには抵抗したのである。

すでに北伐出発前から、蔣はくり返し党内の跨党分子（中共党員）に対して、共産党からの脱退を説得しており、その立場はレーニン主義党の組織原則（民主集中制、党の指導）から逸脱するものではなかった。その限りにおいて、北伐途上における中共に対する鎮圧は、革命の主導権争いが激化する過程で、蔣介石がレーニン主義党の原則を以て、党内の跨党分子の活動の拡大に対抗したものであったと言える。このように、蔣介石における独裁イデオロギーの形成は、国民党ナショナリズムとレーニン主義の結合の基礎の上に、ボルシェヴィキ党の「革命独裁」的性格を継承しつつ、階級闘争とレーニン主義戦術を切り

離すことによって、中国革命における国民党の指導権を確保しようとするものであったのである。

以上見てきたように、蒋介石はレーニン主義を単なるマルクス主義の実践としてでなく、被圧迫民族の民族革命運動にも適用しうる戦術論、組織論として評価していたことがわかる。1926年の中山艦事件の後も、蔣は国民党のコミンテルンへの加入（国民党代表の設置）を画策したが（中共中央党史研究室、1998: 62）、それは単にソ連との関係強化を図ろうとしただけでなく、その究極の目的は、中国革命における国民党の指導的地位を確定し、それによって中共の指導的役割を否定しようとする意図にあった。国民党の加入は結局実現しなかったが、コミンテルンとの関係強化の策略は、後の「一つの党」（国共合併）を巡る構想にも引き継がれた（樹中、1998b: 31-36）。国民党が中共と袂を分かった後もレーニン主義は残り、1929年の政治工作員に対する演説において、蔣が「政治工作員は……以前の党代表（コミッサール制）のような効率を回復しなければならない」と強調しているように（蒋介石、1984 [巻10]: 370）、「反共」後も、レーニン主義的原則は、依然として国民党が模倣すべき革命理論だったのである。

2. 国家的危機とファシズムへの傾斜

1928年の北伐完成後、孫文主義の革命理論は政治制度として逐次に国家の法体系の中に組み込まれ、1930年の訓政時期約法の制定によって、国民党による「革命独裁」の法制化は一応完成する。だが1931年に満州事変が勃発し、蒋介石は日本軍の勢力拡大を有効に食い止められないまま下野に追い込まれ、国民党による「訓政独裁」の弱体を露呈した。1932年に下野から復帰した蒋介石は、国家的危機と体制イデオロギーの弱体を克服する意図から、ファッショの秘密組織（藍衣社）を結成し、急速にファシズムに傾斜していった。

従来の公式史観において、国民党のファッショ化は、コミンテルンの「定式化」（資本主義の危機から生じた「反動」）によって捉えられ（デグラス、1977: 420-421）、蔣政権のファシズムへの傾斜は、大地主・大ブルジョア階級支配を表すものとして解釈されてきた（周恩来、1981: 213-234；劉健清、1987: 964；楊樹標、1989: 199）。だが、このような図式的な枠組では、非公式エリート組織（三民主義力行社 [通称藍衣社]）を担い手とする中国ファシズム運動の特徴を十分に捉えているとは言えない。

たとえば中国ファシズム論者が「公にファシストを模倣し、かつ社会的同情を得られたのは、九一八（満州事変）以後になってからである」と認めるように、非公式エリート組織（藍衣社）によるファシズム運動の盛り上がりは、未曾有の国家的危機が直接の契機であった。中国ファシズム論者によれば「九一八当時の中国民衆の三民主義に対する非難は、他ならぬ『病牛のような組織』の賜物であった！」と批判し、「もしファシストのような力強さで三民主義の実施を欲するならば、民衆と軍隊の密接な協力は不可欠であり、軍人は離間を排し、怨恨を棄て、心底からより団結することが必要だ」と力説する（周毓英、1934: 5, 9）。

また、黄埔軍校出身の青年將校を中核とする中国ファシズム運動は、特定の社会階層に基盤をおいていたわけではなく、実際には非公式エリート組織に基礎をおく「青年ファシスト」運動の性格を有していた。中国ファシズムの理論家である周毓英は、この点を意識して「中国の青年が中国ファシストを指導するとしても、それは他の社会諸階層の放棄を意味するものではない」と述べ、「中国ファシストは、広汎な労働者の参加と、産業家、革命軍人、兵士、そして反抗的な商人と中産階級が必要だ」と階級連合の重要性を説くとともに、「青年は……社会のあらゆる階級から生まれてくるが、彼らの純粋な意識の中には、如何なるエゴも階級的偏見も残っていない」と主張する（周毓英、1934: 27）。だが、周毓英も認めるように、「ファシズム自体には、これといった内容があるわけではなく、それは社会の内容を内容とするものである」とし（同: 3）、「中国社会は三民主義を必要としており、……厳格な組織を以てこれを実施しなければならず、その組織が即ちファシストなのである」と結論づけるのである（同: 7）。

上でみたように、中国ファシズム論は、明確な理論体系を欠き、情緒的で同義語反復の傾向が強い。また、実際の運動の目標も蒋介石を唯一の領袖に押し上げていくことにあった。しかし、藍衣社運動が特定の階級に基盤をおくことなく、また資産階級の利益も代表していなかったことからわかるように、国民党のファシズムへの傾斜は、独占資本の恐慌や経済的危機から生じたものとは言えない。もともと三民主義の革命理論は、階級闘争の不可避性を否定することで、その独自性を確保してきた。たとえば、国民党の理論家である崔書琴が「中山先生の帝国主義に対する認識は、レーニンのそれとは完全に異なる。レーニンは、帝国主義を資本主義発展の最終段階と見なしていたが、彼はそれ（帝国主義）をある種の政治現象と見なしていた」と指摘するように（崔書琴、1954: 77）、国民党は帝国主義と資本主義を同一視することなく、その革命運動には、一貫して「階級調和的志向」（全民政治）を有していた。

むしろ国民党内のファッショ化の欲求には、民族革命運動の戦術強化という意図が込められており、先に見た中国ファシズム論者の「階級連合」的主張は、国民革命期に打ち出した民族革命の戦術（諸階級の連合による反帝統一戦線の結成）の延長という性格を有していたと言える。それ故、民族革命のイデオロギー・戦術強化という視点から見た場合、1930年代における国民党のファシズムへの傾斜は、1920年代におけるレーニン主義の受容と同様に、そのイデオロギー解釈の特徴として、いずれも経済決定論（階級闘争、資本主義の危機）と結びついていなかったことを指摘することができる。藍衣社の主要幹部だった劉健羣が「如何に民衆に本党の主義を受け入れさせ、革命工作を完成させていくかは、本党の組織如何にその成敗がかかっている」と述べるように（劉健羣、1934: 127）、国民党内のファッショ化の欲求は、党組織と体制イデオロギーの弱体に対する危機意識と直接結びついていたのである。蒋介石の中国ファシズム論の特徴は、次章で検討する。

IV 安内攘外時期における国民党のファッショ化

1. 領袖独裁論の構築——三民主義とファシズムの結合

蒋介石は「ファシストの政治理論は、……国家を最高至上の実体国家と認識し、如何なる犠牲をも国民に強いることで、民族生命の存続」を図ろうとするため、「ファシストの指導者は、……最も効率的な統治者である」と評価する（蒋介石、1931b: 106）。これまで蔣のファシズムへの傾斜は、「消極抗日と積極反共（囲剿戦の断行）」を原則とする安内攘外政策の反動的性格を体現するものとして批判的に解釈されてきた（周恩来、1981: 229; 八卷、1972: 219-222; 李敖・汪榮祖、2000: 221）。しかし、劉健羣がその回顧録において、「疑いもなく、当時のヒトラーやムッソリーニによるドイツとイタリアの復興は、人々の注目を浴び、喝采を集める事実であった。彼らは公然と英米の民主制度を一つの無益な浪費と攻撃した」と回想しているように（劉健羣、1988: 234）、1930年代の中国において、ファシズムは忌み嫌われるものでなく、むしろそれは、レーニン主義とともに、欧米型の民主主義政治の無力さを克服するための模倣すべき集権政治のモデルであった。それ故、蔣による全面ファッショ化の主張は、国民党が現実直面した政治課題（イデオロギーと党組織の強化、囲剿戦の遂行、国家分裂の克服）との関連で検討しなければならない。

1933年9月20日、囲剿戦最前線の江西における演説で、蒋介石は黨員に「中国法西斯蒂」となるよう呼びかけ、ファシストと成るための条件として、(一) 民族ルネッサンス、(二) 一切の軍事化、(三) 唯一の領袖への信仰、の三つの精神を持つべきことを提唱した。蔣によれば、「凡そファシストは必ず自己の民族が最優秀な民族であると信じ、自己の民族の過去の歴史が最も栄えある歴史であり、自己の民族文化を最も優秀な文化であると認識している。『格物致知、誠意正心、修身齐家治国平天下』は我が民族の最高文化であり、忠孝仁愛信義和平—即ち『礼義廉恥』は、我が民族固有の道徳である。智仁勇の三則は我が民族伝統の精神であり、三民主義は、我が民族革命の唯一の原則である」と説いた（蒋介石、1984 [巻11]: 565-566）。

蔣のファシズム論の第一の特徴は、ファシズムと孫文主義の伝統的側面を結合した点にある。「格物致知」以下の一連の儒教道徳は、孫文が三民主義講演においてしばしば好んで用いたものであった。蔣においては、ファシズムと孫文の民族主義は同義語と言ってよく、それ故、蔣は躊躇することなくファシズムを伝統道徳と結合し、その演繹解釈の延長線上に、意識的に公式イデオロギーである三民主義とも結びつけた。蔣のファシズムへの傾斜は、自民族の墮落に対する反省が込められている。蔣は「我々は『礼義廉恥』の精神を取り入れなければ、墮落した民徳と人心を救えず……革命の基礎を確立できない」と述べ（蒋介石、1984 [巻10]: 498）、伝統道徳に革命精神の復活を求めた。後に礼義廉恥は、イタリア、ドイツの復興を手本とする新生活運動の中心概念となる。蒋介石は、三民主義にファシスト精神を注入し、ファッショ化（民族ルネッサンス）によって、形骸化しつつあ

た体制イデオロギーの活性化を図ろうとしたのである。

蒋によるファシズム解釈の第二の特徴は、一切の軍事化という主張にある。蒋は「凡そファシストは、その組織、精神、活動のすべてを必ず軍事化できる」とし、「全ての党員は……軍人の習慣と精神、軍隊の組織と規律とを持たなくてはならず……団体、党、国家のために一切を犠牲にしなければならない」と強調する（蒋介石、1984 [巻11]: 566）。ここで蒋の言う「軍事化」とは、すべての政治課題を軍事力と軍事的手段によって解決すべきことを主張しているのではなく、軍事組織のような精神（団結力）と規律（組織力）を以て、国民党内の組織的分裂とイデオロギー的分岐を克服しようとするのがその目的であった。蒋介石が「軍事三分政治七分」を困窮戦の戦術として掲げ、廬山軍官訓練団に力を入れたように、蒋は絶えず政治工作の重要性を意識し、党組織の弱体こそ、国民党の致命傷と自覚していた。蒋介石は、ファシズムをレーニン主義に代わる組織技術として導入し、ファッショ化、すなわち組織的にもイデオロギー的にも「軍事化」（団結と規律を全党員に強制）することによって、中共の厳密な組織に対抗しようとしたのである。

蒋のファシズム解釈の第三の特徴は、領袖に対する絶対的信仰を要求していることである。蒋によれば、「ファシストの最も重要な点は、即ち絶対的に一人の賢明にして有能な領袖を信仰することである。彼以外に、第二の領袖あるいは第二の主義はない、即ち完全に一人の人間を信仰するのである！……ファシストの特質は、……一切の権力と責任を領袖一人に集中することであり、……どの党員も、直接的には領袖、団体の為に犠牲を払い、間接的には社会、国家、革命と主義の為に一切を犠牲にしなければならない！……このようにしてこそ、われわれははじめて真にファシストと呼ばれることができるのである」と主張する（蒋介石、1984 [巻11]: 566-567）。蒋の領袖独裁論は、領袖の意志を支配の正統性の基礎と見なし、個人の自由と権利を制限する立場から、個人の全体（党と国家）への奉仕を要求しているのが特徴である。蒋のこのような領袖独裁論は、ナチスドイツの「指導者原理」を忠実に模倣したものであったと言ってよい。蒋介石が改めて領袖独裁論を構築したのは、より効率的な国家統治と社会動員を図るとともに、「指導者原理」を国民党内に導入することによって、孫文の正統後継者としての自分の地位をも確定させようとする意図が込められていたのである。

蒋介石は三民主義の実現を強調しながらも、そのファッショ化の欲求は、国民党の公式イデオロギーが実質的に機能していなかったことを意味する。蒋は孫文主義の儒教的側面とファシズムを意識的に結合したため、その主張は、伝統への回帰を強く志向しているように見える。だが、伝統道徳に革命精神の礎をおいたとしても、儒教には徳治の概念しかなく、革命独裁の発想はない。それ故、蒋は伝統の復興を唱えつつも、ドイツ流の国家有機体説を吸収し、その国家観の基礎の上に、ファッショ化のための理論を組み立てた。

蒋によれば、「国家とは、即ち一個の有機体である。……国家は生命を有し、全てを超越する集合的組織である。その全ての機構は、即ち一つの完成された生命体である。各々の国民は、この生命体を構成する一つの細胞であり、全民族の歴史と文化…根本精神が即

ち国家の靈魂である」とし、「現在、わが国が存続の危機に瀕しているのは、国魂を喪失したからに他ならない」と述べ、「わが中国の靈魂は、即ち総理の三民主義である」と強調した（蒋介石、1984 [巻12]: 350-351）。蔣は、三民主義とファシズムを結合することによって、「中国魂」（体制イデオロギー）の甦生を図り、党内に蔓延する危機意識と無力感を「反共ファシズム運動」（藍衣社）に向かわせるとともに、その「国家至上・民族至上」というファシヨ的国家観の提出は、反共内戦の継続に必要な人的・経済的資源を動員するための論理となったのである。

2. ファシズムへの不完全な「移行」

それでは、国民党のファシヨ化をどのように位置づけるべきであろうか。ここでは、レーニン主義の受容との関連で、そのファシズムへの「移行」の特徴を検討する。

1928-31年にかけて、国民党はソ連共産党を模倣した以党治国体制の確立に実質的に失敗した（樹中、2000）。ヨーロッパにおけるファシズム運動の成功に刺激を受けた蒋介石とその追随者は、1932年に秘密裏にファシヨ的独裁組織（藍衣社）の結成に着手し、初代書記だった滕傑ら幹部をイタリア、ドイツへ視察に派遣するなど、そのファシズムへの「移行」を鮮明にした（李雲漢、1993: 19-33）。蔣は政敵からの攻撃を避けるため、公式的には三民主義を標榜し、ファシズムへの関与を打ち消していたが、1933-34年の第五次圍剿戦の激化と相まって藍衣社運動は急速に勢力を伸ばした。1938年に三民主義青年団の成立によって藍衣社が発展的解消を遂げるまで、領袖独裁論に代表されるファシズムへの模倣は、半ば公然の形で続いた。

蒋介石による領袖独裁論の構築は、形骸化しつつあった三民主義をファシズムと結合し、全面ファシヨ化（民族ルネッサンス、軍事化〔規律と組織の強化〕、蔣個人への服従）によって、国家を統合するための政治的基盤を改めて作り出そうとするものであった。前節で見たように、領袖独裁論は指導者原理と国家有機体説を模倣したものであり、蔣独自の思想によって裏打ちされたものではなかった。また、蔣は政治的集権化のモデルをファシズムに移したものの、それは既に国民党組織に組み込まれているレーニン主義的原則（民主集中制、党の指導、暴力的権力奪取）を否定するものとはならなかった。

蔣によれば、「ある国家がファシスト党を組織するには……第一に、民族性が弱く、極めて散漫でなければ、……緩やかな民族的結合を厳密な組織に作り替えていくことはできない」とし、「第二の条件は、国民教育が普及していないこと」と述べ、「国民全体の知識程度が低いため、一つの党が専政を行い……強制的に国民に教育を受けさせることができる」と主張し、イタリアとソ連が独裁統治に成功したのは、この二つの条件を満たしていたからと強調する。ここで、蔣はファシズムとレーニン主義のイデオロギー的敵対面に関心を払っていない。また、脆弱な民族性をファシズムの条件としつつも、蔣はナチスドイツの国民性への言及がなく、そのうえ日本人のような強い国民性の下では「ファシズムは必ず失敗する」と断定するなど、そのファシズム解釈は、極めて恣意的であった（蒋介石、

1984 [巻10]: 574)。

この時期の蔣の演説を丹念に調べても、その甚だ曖昧なファシズム論の全体像を掴むのは難しい。しかし、蔣が無知な民衆に対する教育的指導を強調しているように、その「ファシヨ的領袖独裁」の主張は、国民党による「訓政独裁」の発想とも相通ずるものであったと言える。蔣によれば、「英米の民主主義は、その長期にわたる進歩の歴史を有し、人民は民権の運用に知悉している……だが、このような歴史的社会的背景のない国家においてこれを実施すれば、その結果は、ファシスト党が政権奪取する以前のイタリアの混乱状態を見れば明らかであろう。…自由は必ず責任を伴わなければ、その意味を失う」と警告し（蒋介石、1931b: 107）、「訓練 [訓政] を経ていない人民は、決して政権を担ってはならない」と強調した（蒋介石、1984 [巻16]: 77）。

このように、蔣におけるレーニン主義からファシズムへの傾斜は、「極左から極右へ」の転向と言うより、むしろそこには、欧米型の自由民主政治に対する懐疑という立場が貫かれていたと指摘することができる。ファシズムは、レーニン主義とのイデオロギー的敵対にもかかわらず、ブルジョア社会の腐敗を攻撃し、天賦人権の否定、党への権力集中を主張するという点では共通している。藍衣社が民主集中制とソ連共産党の書記制を模倣しているように、蔣とその追随者にとって、ファシズムはレーニン主義と抵触するものではなかった。それ故、蔣の眼には、ファシズムは「訓政独裁」を再強化するための独裁統治の技術として映ったのである。

だが、ファシズムへの羨望にもかかわらず、蒋介石はファシズムに完全に賛同していたわけではなかった。蔣によれば「その国際上の影響（侵略）は、果たして大同の原則にかなうか否かは、誰でも自ずとわかるであろう」と批判し、国民党の「民族主義は、民権、民生主義と補い合いながら実施すれば、決して国際的な侵略の危険に流されることはなく、むしろ大同を目標とするだろう」と（蒋介石、1931b: 106）、逆に三民主義の優越性を強調する。ヒットラーやムッソリーニとは異なり、蔣の独裁イデオロギーには、狭隘な種族主義と対外侵略の発想はない。B・ムーア（Barrington Moore, Jr.）氏も、「国民党はヨーロッパのファシズムと大きく異なっている。……明白な相違のひとつは、中国には強力な産業基盤がなかった」と述べ、「中国の反動期はドイツやイタリアや日本のファシズム期に生じたような、対外膨張を伴うものにはならなかった」と結論づけている（ムーア、1986: 242）。

むしろ、蔣がナショナリズム運動の戦略としてレーニン主義とファシズムを国民党のイデオロギー体系（三民主義）に組み込んでいるように、安内攘外時期におけるその全面ファシヨ化の主張は、国民革命時期に打ち出した反帝ナショナリズムの「発展」（戦術・イデオロギー的強化）の延長という性格を有していた。だが、蔣は政権奪取と政治的集権化のための戦術論、組織論としてレーニン主義とファシズムを導入したものの、共産主義革命と種族革命を目指さなかったという意味で、彼はレニニストでもファシストでもなかった。蔣は、あくまでも両者を以党治国の成功例として模倣し、それぞれの集権技術の導入

によって、国家の分裂を克服しようとしたのがその究極の目的であった。蔣がレーニン戦術を採用し、対外的反帝闘争を対内統一に向かわせようとしたように、そのファッション化政策も国内政治の延長（統一優先）を超えるものとはならなかったのである。

1932-37年の盧溝橋事変に至るまで、反共キャンペーンの進展と呼応する形で、蔣個人を権力の頂点とするファッション的領袖独裁への「移行」が進んだ。だが厳密に言えば、蔣による個人独裁は、全体主義的「革命独裁」とは程遠いものであった。また、非公式エリート組織による中国ファシズム運動が秘密的性格であったため、イデオロギー的にも運動の形態においても、国民党の政治体制全体に拡大していくことはなかった。イタリアやドイツのような大衆的熱狂と領袖への個人崇拜を作り出せなかったという意味で、また公式的には三民主義の優越性を強調し、既存のレーニン主義的原則とも不分明な形で混在したように、国民党のファシズムへの「移行」は、不完全なものでしかなかったのである。それ故、蔣の独裁統治にはレーニン主義的原則とファッション的行動様式が混在したとしても驚くに当たらない。両者の混在を巡る特徴は、結論でさらに検討を加える。

V 結論——レーニン主義とファシズムの混在

以上、蒋介石の独裁イデオロギーの形成とその発展過程における解釈の特徴を検討してきた。本論文が明らかにしたように、蔣による独裁統治のイデオロギー的特徴は、その集権政治のモデルが1920年代におけるレーニン主義への模倣から、1930年代にはファシズムに次第に大きく傾斜していった点である。蔣による「一つの主義・一つの党」の主張は、レーニン主義とファシズムにその「型」があり、それ故、その独裁体制にはレーニン主義とファシズムの要素が混在する。たとえ蔣の独裁体制がレーニン主義ともファシズムとも性格を異にするものであったとしても、その独裁統治は、模倣を通じて実体化されたものであり、とりわけ(1)国民党ナショナリズム運動の戦略、(2)「革命独裁」の理論的整備、(3)組織基盤の強化、の三つの面において両者の影響が顕著であった。しかし、蔣が「各々の国には、それぞれの客観的な環境があり、世の中には、決して完全に移植することのできる政治（体制）は存在しない」と強調するように（蒋介石、1931b: 107）、蔣は外来の独裁理論を無条件、無原則に受容したわけではなかった。以下、蔣におけるレーニン主義とファシズムの混在に注目し、(1)~(3)との関連で、蔣の独裁イデオロギーとその統治様式に対する考察を深めていくことにする。

第一に、国民党ナショナリズム運動の戦略という観点から見た場合、蒋介石は公式的には三民主義の実現を標榜していたが、その民族革命の戦術は、外来の独裁イデオロギーと直接結合していた。広東時代の蔣は、国民革命をコミンテルン指導の世界革命の一部と位置づけ、コミンテルンとの連合がなければ中国の民族解放運動は成功しないと主張する。しかし、蔣はレーニン主義を国民党の民族解放運動の戦術（反帝闘争）として取り入れな

がらも階級革命を否定し、レーニンのように帝国主義を資本主義発展の最終段階と見なしていなかった。また、蔣による全面ファッション化の主張も、国家的危機と民族主義的欲求に根ざしており、独占資本の恐慌や経済的危機とは直接結びついていない。もともと三民主義革命には、階級調和的志向と大同的理想を有しており、経済決定論と他民族に対する圧迫を意識的に拒否する傾向にある。この傾向は、蔣におけるレーニン主義とファシズムの受容にも反映された。すなわち、蒋介石は、レーニン主義を階級革命と切り離すことによって、国民革命運動への適応を図り、ファシズムを民族ルネッサンスの理論として導入しながらも、狭隘な種族主義と対外侵略には同調しなかったように、蔣はあくまでも民族主義革命の基礎（統一優先）の上に、国民党の公式イデオロギー（三民主義）の強化を図りつつ、その本質的「反共ナショナリスト」としての立場を貫こうとしたのである。

第二に、蔣は三民主義を国家統合のイデオロギー的基盤として掲げながらも、その「革命独裁」の原則は、戦術論、組織論としてのレーニン主義とファシズムに依存していた。蔣の独裁イデオロギーは、コミンテルンの強い影響下に作成された「国民党一中全会宣言」の「革命独裁」的性格を継承し、天賦人權の否定と「党の指導」に従わなければ自由も民主も享受できないという指導民主主義を原則としつつ、ファシズムの影響を直接受けた領袖独裁を確立しようとするものであった。もともと欧米型の議会政治を組み換えた孫文の民権主義は、「訓政独裁」を志向しつつも、それを実行するための方法を欠いていた。「革命独裁」の確立を図った蔣は、レーニン主義を暴力的政権奪取と以党治国のモデルとし、ファシズムを形骸化した「訓政独裁」を活性化するための独裁統治の技術として導入した。三民主義と共産主義の同質性を強調し、三民主義をファシズムと結合したように、蔣はイデオロギー解釈を操作することで、国民党独裁の独自性を確保しようとした。レーニン主義とファシズムは、そのイデオロギー的敵対にもかかわらず、厳格な規律と組織、個人の自由の制限、エリートによる権力の独占という点では完全に一致する。それ故、蔣のファシズム論（領袖への権力集中 [指導者原理]）は、国民党に組み込まれたレーニン主義の原則と抵触することなく、模倣すべき以党治国のモデルとして取り込まれたのである。

第三に、蔣の国家に対する統制は、法制化（訓政時期約法の制定）を基礎としつつも、その独裁統治を支える組織的基盤（党、軍事機構、秘密組織）は、レーニン主義の原則とファッション的行動様式を模倣したものであった。1932年の二度目の下野から復帰した後、形骸化した以党治国体制に代わって、蔣が安内攘外政策を遂行する過程で、実際に依存した組織的基盤は、国民政府軍事委員会（ソ連革命軍事委員会の模倣）と、非公式エリート組織（藍衣社）であった。蔣が既存の党組織の基礎の上に「ファッション的領袖独裁」の確立を目指したように、その統治様式は、レーニン主義党の原則（民主集中制、党の指導）と、ファッション的独裁（軍事化 [規律と組織の強化]、領袖崇拜）とが不分明な形で混在するというものであった。抗日戦争勃発後も、蔣は藍衣社の精神を三民主義青年団に移植するよう指示し（李勇・張仲田、1995: 263）、また国共内戦末期においてさえ、共産党組織に学ぶべきことを呼びかけているように（蒋介石、1984 [巻22]: 338-339）、その集権政治のモデルは、一貫してレーニ

ン主義とファシズムであった。蒋介石は組織の弱体こそ、国民党の致命傷と自覚し、その全体主義政治に対する模倣の究極の目的は、「一つの主義・一つの党」を真に打ち立てることによって、国民党の革命の指導権を確保するとともに、辛亥革命後に続いていた国家権力の分散を根本から克服しようと図ったからである。

もともとレーニン主義は、マルクス主義革命の実践として構築され、ファシズムには、対外侵略性と種族主義を内包している。しかし、蒋介石によって、レーニン主義は階級闘争と分離し、ファシズムは種族主義と切り離されたように、国民党の民族革命運動において、外来の独裁イデオロギーは、その本来の特性（共産主義革命、対外膨張）を選択的に切り捨てられ、純粹に集権政治のモデルとして導入された。むしろ蔣にとって深刻だったのは、レーニン主義やファシズムのような強力な一元的権力集中を構築するために必要な党の下部組織が弱体だったことである。北伐完成後、共産党への対抗から、蔣は政権の安定を脅かす危険のある「下から」の大衆運動には消極的であった。非公式エリート組織によって担われた中国ファシズム運動が、「下から」の運動としてついに成功せず、また新生活運動が大衆的熱狂を作り出せないまま挫折したように、蔣の独裁体制には、民衆を運動に動員、組織化し、強力な宣伝キャンペーンの継続と組織的動員による指導者への個人崇拜を作り出すための厳密な下層組織を欠いていた。蔣による独裁統治は、全体主義的傾向（レーニン主義の原則とファシヨ的行動様式）を有しながらも、実際には、レーニン主義ともファシズムとも「似て非なるもの」でしかなく、その実態は、軍事機構（軍事委員会と各地の「委員長行営」）とテロ組織（軍事委員会調査統計局〔通称軍統〕）に依存する権威主義的支配だったのである（樹中、2001）。

（注）

- 1) 近年の研究として、黄仁宇（1994）、楊天石（2002）がある。ともに深い洞察を含んではいるが、伝記形式による日記の解説と歴史事件の真相解明に力点がおかれている。また家近亮子氏の研究（家近、2002）は、南京政府の支配の不浸透要因に主題があるため、蔣の独裁理論に対する考察が充分でなく、そこから蔣の独裁イデオロギーの全体像を推論するのは自ずと限界がある。
- 2) すでに別稿（樹中、1998a）において、権力の再分配と正統性の獲得を巡る競争という視角から、4・12クーデタを詳細に検討しているので、ここでは繰り返さない。

（参考文献）

日本語

- 味岡徹（1991）、「孫文における大衆と革命党」『駒沢大学外国語部論集』第34号。
- 家近亮子（2002）、『蒋介石と南京国民政府』慶應義塾大学出版会。
- 今井駿（1997）、『中国革命と対日抗戦』汲古書院。
- 川島弘三（1988）、『中国党軍関係の研究』上、慶応通信。
- 樹中毅（1998a）、「孫文没後の党内権力継承と『左派』蒋介石の台頭」、『法学政治学論究』慶應義塾大学、第36号。
- （1998b）、「安内攘外戦略と中国国民党の政策決定過程」、『法学政治学論究』慶應義塾大学、第39号。
- （2000）、「国民革命期から訓政時期における蒋介石の独裁統治と政治的不安定の構造」、『法学政治学論究』慶應義塾大学、第45号。

- (2001)、「強い権威主義支配と弱いレーニン主義党——軍事委員会委員長南昌行營と南京国民政府の地方への権力浸透」『法学政治学論究』慶應義塾大学、第51号。
- 周恩来 (1981)、『周恩来選集 (1926-1949年)』外文出版社、北京。
- J・デグラス (1977)、荒畑寒村他訳『コミンテルン・ドキュメント』II、現代思潮社。
- S・ノイマン (1960)、岩永健吉郎他訳『大衆国家と独裁』みすず書房。
- 野村浩一 (1997)、『蒋介石と毛沢東』岩波書店。
- バリントン・ムーア Jr. (1986)、宮崎隆次・守山茂徳・高橋直樹訳『独裁と民主政治の社会的起源 I』岩波書店。
- 八巻佳子 (1972)、「中国における法西斯主義をめぐって」『季刊社会思想』2巻3号。
- 山田辰雄 (1980)、『中国国民党左派の研究』慶応通信。
- 横山宏章 (1996)、『中華民国史』三一書房。
- レーニン (1958)、『レーニン全集』第28巻、大月書店。

英語

- Eastman, Lloyd E. (1974), *The Abortive Revolution: China under Nationalist Rule 1927-1937*, Harvard University Press, Cambridge.
- Loh, Pichon P. Y. (1971), *The Early Chiang Kai-shek: A Study of His Personality and Politics 1887-1924*, Columbia University Press, New York.
- Tian, Hung-mao (1972), *Government and Politics in Kuomintang China 1927-1937*, Stanford University Press, Stanford.

中国語

- 黄仁宇 (1994)、『従大歴史的角度読蒋介石日記』時報文化、台北。
- 蒋介石 (1925)、『蒋介石對於聯俄問題的意見』中国国民党中央執行委員会宣伝部。
- (1926)、『蒋介石先生最近之言論』民社、北京。
- (1927a)、文砥編『蒋介石の革命工作』上、太平洋書店。
- (1927b)、文砥編『蒋介石の革命工作』下、太平洋書店。
- (1931a)、『自反録』巻3、上海中華書局。
- (1931b)、『国民會議実録』出版社欠落、原出は『華北日報』(1931年5月7日)。
- (1984)、秦孝儀編『総統蔣公思想言論総集』全41巻、中国国民党中央委員会党史委員会、台北。
- (1987)、『4・12反革命政変資料選編』人民出版社、北京。
- 蔣永敬 (2000)、「蔣中正先生赴俄考察記」『近代中国』第136期、台北。
- 李敖・汪榮祖 (2000)、『蒋介石評伝』上、中国友誼出版公司、北京。
- 李勇・張仲田 (1995)、『蒋介石年譜』中共党史出版社、北京。
- 李雲漢 (1994)、『中国国民党史述』第2編、中国国民党中央委員会党史委員会、台北。
- (1993)、『滕傑先生訪問記録』近代中国出版社、台北。
- 劉健羣 (1988)、『銀河憶往』伝記文学出版社、台北。
- (1934)、『復興中国革命之路』中国文化学会。
- 劉健清 (1987)、「国民党内法西斯主義の泛起与蒋介石独裁統治の建立」、(王檜林・魯振祥編『中国現代史百題』下、湖南人民出版社、長沙)。
- 崔書琴 (1954)、『孫中山與共產主義』亞洲出版社、香港。
- 楊樹標 (1989)、『蒋介石伝』團結出版社、北京。
- 楊天石 (2002)、『蔣氏秘档与蒋介石真相』社会科学文献出版社、北京。
- 中共中央党史研究室 (1997)、『聯共(布)、共產國際与中国国民革命運動 (1920-1925)』1、北京図書館出版社。
- (1998)、『聯共(布)、共產國際与中国国民革命運動 (1926-1927)』4、北京図書館出版社。
- 周毓英 (1934)、『法西斯蒂與中国革命』民族書局、上海。

(きなか・つよし E-mail: MAG01603@nifty.ne.jp)